月刊

立川と語ろう 立川に生きよう

<EKUTEBIAN-VOL.3, FEBRUARY 1986-EKUTEBIAN>

まい あーと・ファンシーエッグ by 渡部和美

たこ凧あがれ

●たちかわ凧の会●

少年の夢は、天を翔ることであった。それが叶わぬなら、この身を凧に託して大空をわがもの顔で舞ってみたい。凧が立川にもよみがえってきた。それのみか、夢を編むかのように骨を組み、紙を合わせての「凧づくり」に、親子そろって興じ、その凧をあげる——醍醐味であります。

1日目

▶錦公民館の親子「凧づくり教室」には今回16組の参加があった。

▼初めての絵付けに伝統的な図柄を選んだ、綾田みえ子さん、光章クン。

絵付け
Painting

2日目

◀絵付けした凧に骨を付けていく。講師の説明に皆、真剣！

▼「しっかり押えてるからネ」と正子おばあちゃん、松山貴俊クン。

組立て
Assembling

3日目

◀「下の糸が長いのかなあ」湯山龍さん、寛クン。

出来たあ！ 講師の五十嵐さん▶が1人1人の凧を見る。

▼親子一体三日間の力作を持って、はいチーズ！

準備
Ready

4日目

「とんだ、翔んだ！」無事全員▶の凧があがった。凧はやっぱとばなきゃ。

▼「良くとんだで賞」「絵が良かったで賞」とそれぞれにユニークな賞も。

翔んだ！
Fly a Kite

市の紋章をかたど▶った「たちかわ凧」

新連載

新しい年をむかえて、ちょっぴり新鮮味をだしてみたいと、欲ばってみました。身近かで案外と知らない郷土史にスポットをあてる一方、漢字の効用が見直されてきた昨今の時流にゲーゴーして漢字の「テスト」で教養満載！

立川・歴史のひとコマ

❶『立川』という地名

立川の地形・環境は太古の昔に形成された多摩川と、その河岸段丘、それに武蔵野の平地と砂川の山林などで成り立っております。

中世には、立川は「立川郷」という郷の名で呼ばれていましたが、平安末期から鎌倉時代はじめには立川（立河）氏と名乗る土着の武士が力をつけ、柴崎町普済寺付近を館としていたと伝えられます。『吾妻鏡』にも暦仁元年（一二三八）、立河三郎兵衛尉基泰という武士が将軍に従って京にのぼったと記録されております。

この立川（立河）氏は、平安時代の武蔵国の国司日奉氏から出ていますが、おそらく立川という地名から姓としたのでしょう。

また天正十四年（一五八五）に八幡宮（現在は柴崎町諏訪神社に合祀）に奉納された阿弥陀如来坐像の背面には「武州多東郡立河郷芝崎村八幡本地再興願主立河照重内女お彌々」と刻まれています。

江戸時代には柴崎村と呼ばれ、「新編武蔵風土記稿」（文政十一年）には「柴崎村は……地形平陸にして四方打開け陸田多く水田少なし。東は青柳村（国立市）に境い、南は多摩川を隔て日野本郷宿に接す。西は郷地村（昭島市）に隣り、北は砂川村に及ぶ。東西およそ三十町余り（約三千二百㍍）南北二十一町ほど（約二千二百㍍）。民家二百四十八軒、……日本橋より行程十里半（約四十一㌔）」と記されております。

明治十四年（一八八一）柴崎村は近隣の部落を合併し、古い郷名立川（立河）を復活させて『立川村』となりました。これが現在の立川市へと発展してゆくことになります。

『立川』という地名そのものの由来には諸説ありまして、タチとは「河川、沼沢に面する丘陵などを利用した小規模のとりで」を意味し、多摩川の段丘の上にとりで（タチ）があり、その近くを流れる川がタチ川であるという説があります。

立川氏館跡と伝えられる普済寺付近は多摩川を眼下にする台地の突端で、ここには石器時代の遺跡もあることから推して、ここにタチが築かれたのはかなり古い時代だと思われます。（KK）

漢字テスト①

空欄に一字挿入を試みよ。

自□自賛

同工異□

新会員募集中

立川子ども劇場ごあんない

子どもたちに夢を！　たくましく豊かな創造性を！

子ども劇場は親と子が観劇やキャンプなどに共に参加してのびのびと自由に自分から進んで考え、行動できる子どもに育てたいと、地域のお母さんたちでつくり出した子育ての会です。

〈事務局〉立川市曙町1-21-4　0425-26-0731

新年4日に立川高島屋で大鵬部屋 大関 大乃国関による新春もちつき大会とサイン会が行われた。

会場には多くの親子が訪れ力士のついたもちに舌鼓を打った。初めて力士を見た子供は大きな身体に驚きの声が上った。

高見沢潤子 特別講演会
―青少年問題―
2月8日（土）
2:00～4:00P.M.
立川市民会館小ホール
主催：立川YMCA
後援：立川市教育委員会

事後報告「ベスト立川人展'85」

【会名】ベスト立川人・展'85【出展】立川人27名、ゲスト8名【会期】昭和60年12月12日～18日【会場】朝日ギャラリー【後援】立川商工会議所・立川青年会議所・立川市文化連盟・立川市社会福祉協議会ほか【観覧者数】1,746人【フォトグラファー】天野武男・吉田義治・小林洋治・加藤正嘉・武田和紀【アートディレクター】小塚秀忠【トータルマネジャー】後藤文子【特別寄稿】東海林さだお【暖簾・書】佐藤法雄

総括すると、以上のようになる。

主催する「月刊えくてびあん」もこのような写真展は初体験であったため、多くのトマドイを感じながら一進一退の準備を進めてきた。

大変に失礼な表現で恐縮だが、立川にそんな"人材（スタッフ）"が揃っているだろうか、というのが取材者の正直な感想だった。しかし、それも杞憂におわった。

いたのです、"人材（スタッフ）"が。今度はどなたにご登場願ったらいいか、うれしい悲鳴をあげる番になった。

それのみか、取材中にカヌー選手権二位（小林弘子さん）、パワーリフティング日本新記録（西尾慶子さん）の朗報がはいってきたりした。

秀れたカメラマンにめぐまれたこと、ベテランのアートディレクターが指揮をとってくださったことなど、こちらの"人材（スタッフ）"にもめぐまれた点が大きい。が、なんといっても出展者の協力をみのがしてはならないだろう。

▲立川'85のV・I・P、全員集合。テーブル中央の氷彫刻は「立川平安閣」の"友情出演"。

▶会期中に立川での初公演を終えた、ハンドベルの児玉静己さん

▶ケン玉六段の技を披露、ナミいる立川人から拍手、また拍手

主催者は出展者に対して謝意を込めたパーティーを最終日、閉展後に開いたが、ここにある五点の写真はその一部。

出展者、後援をして下さった諸団体、銀行筋、さらには教育関係者もつどい、なごやかな懇親のひと時をもつことが出来た。

いわゆるマスコミが"発信専用"なのに対し、地域誌のもつ役割は"受信・発信両用"が特徴といえよう。昨日の読者が今日は誌面の主役を演じている――こちらの方がむしろ「コミュニケーション」の本道をいっているのではないだろうか。

そういう意味で、今回の立川人展は一応の成果を収め、次回はいっそう市民との密着が期待されているようだ。

▼これが日本一の"力持ち"とはおもえない貴婦人・西尾慶子さん

▶マイク真木さん所用で、代役は[illegible]子夫人。さすがにシック

表紙は語る

今月の表紙は「ファンシー・エッグ」の渡部和美さんであります。つまり、幻想的卵芸術とでも申しましょうか。「日本では最近のことですが、アメリカでは古い歴史をもつもので、私はたまたま主婦の片手間、ロスアンゼルスで10年くらい前から習っていたんです。

3年前に東京・ホテルオータニで個展を開きましたら大好評で、それはよかったのですが、ぜひに教えろという方が二百人くらいになってしまったんですね。急遽、指導するということに…」

主婦から一転、日本で初のファンシーエッグ指導者というのだから、人生のウンはどこから開けてくるのか知れたものではない。

生徒さんはふえ続ける一方で、東京と大阪に本部を設ける程の人気ぶり。それのみか、ロサンゼルスにも。

「手工芸の世界は幅が広いですから、いろいろな素材、技術がからみ合っているのでしょうが、ファンシー・エッグの場合、やはり"ノーブルな感覚"にひかれるのではないでしょうか。ヨーロッパでは古くから貴婦人の間でもてはやされてきた伝統がありますから」

今回、表紙の作品は立川・高島屋で行なわれた展示会の時のもの。

「ゴージャスなふん囲気が、見ためよりも易しいテクニックで作れるのがミソかしら？」問合せ先・03-269-8007。

漢字テスト・答

(イ) 自画自賛　手前味噌と同義。「画」を「我」にするは誤り。

(ロ) 同工異曲　大同小異と同義。主に詩歌音曲などに用う。

真如苑だより

「へぇー、もう50年もたつのかえぇ？」と驚かれる方もおいででしょう。そうです、真如苑は今年、50年祭を迎えさせて頂きます。一度、どっしりとした礎（いしずえ）をご覧ください。

■日時　2月22日(土)　午後2時から4時。

■御本尊、真如宝物館をはじめとして映画など盛りだくさんの用意がしてございます。

■立川市民（成人）に限らせて頂きます。

■お申し込みは「えくてびあん・コンパニオン」(本誌を手渡してくれた人)へ。

？立川クイズ

今月から立川の歴史の連載が始まりましたが、立川にも歴史的に大変貴重なものがあります。次のうち国宝はどれでしょう。

①普済寺開山物外和尚坐像

②勝坂式土器（羽衣町出土）

③六面石幢（普　済　寺）

【1月号の答え】登録されているだけで三千二百八十五頭の犬が立川市内にいます。立川・国立・昭島・武蔵村山の4市の中では一番で、以下昭島市の二千五百頭、武蔵村山市の千九百頭、国立市の千四百頭となります。立川人はやっぱし犬好きのようです。答えは②

工房から

●いよいよ、昭和61年の開幕。世紀のカレンダー〈へら・び・あん・ろーず〉で云えば右ッ側に突入したわけであります。このカレンダーを手にしたある立川人「これで一生、カレンダーの心配なしだな」。●そういうもんじゃないでしょ。日めくりなどはなかなかのもんです。ある百貨店では「オレンダー展」を開いた。●それにしても〈へら・び・あん・ろーず〉どこをどう旅しているのか、トンデモナイ所から注文がきたりする。この間なんか、上尾市のガッコの先生から学生に配りたいから送ってくれ、学生は四百人を越すと書いてある。凄まじいカレンダー魂であります。●そもそも、本品は立川人の利用をもって本分とするのじゃないの？　まあ、おおめにみましょ。●極寒のゆたかにあきき　えくてびあん。

(写真) 天野武男　吉田義治　スタジオ269
(編集) 青葉典子　岡悦子　加賀聖子　神山清子　鴨川達　田中恵子　原田礼子　矢野義範

月刊えくてびあん　第19号
昭和六十一年二月一日　発行
発行所　えくてびあん編集工房
東京都立川市柴崎町2－4－11　ファインビルディング　3F
電話　○四二五(23)０082
編集人　立井啓介
発行人　沖野嘉男
印刷所　株式会社　立川印刷所

Viens Valser avec Nous

れっつ・だんす

いつの時代も「本格」はすたれない、その見本がソシアル・ダンスであります。NHKテレビ番組に「レッツ・ダンス！」がある。本日はそのビデオ撮りとあって、立川のダンスファンはそそとして市民体育館に集合、いずれ劣らぬ風雅なムードに酔いしれた一宵でありました。

◀最後までカチッと決める。流石のフォームは倉持嘉治・榮子夫妻。

▶本番中でやはり緊張するが、一旦踊り出せば大丈夫。

▶男性のリードの優しさの中に大人の雰囲気が漂う。

◀「ヒャー、終った」カメラマンだって本番には緊張しますです。

◀「私達だって」と小さな紳士淑女は市立第十小学校のみんな。

◀上月晃さんの歌と踊り、リードする篠田学先生。